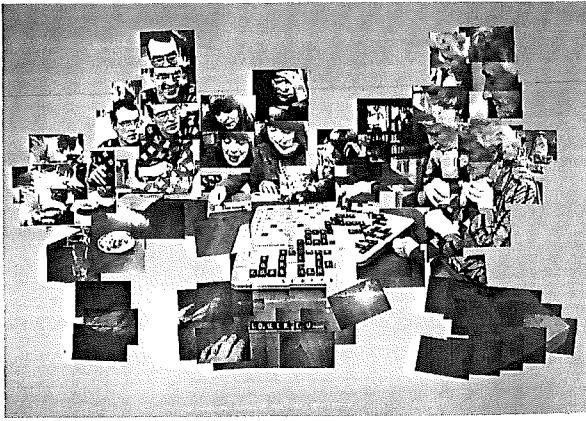


さて、これまで絵画と写真の両方の側から、十九世紀における交流のあり方を考えてきました。もちろん二十世紀以降になっても、両者の関係は途絶えることなく続いています。そのことを逐一述べていってはきりがありませんから、ここでは一挙に時代を飛びこえて現代の例をいくつかあげておきましょう。まず次の作品を見て下さい。デイヴィッド・ホックニーの「文字合わせゲーム、ロスアンジェルス、1983年1月1日」(19)です。

ホックニーはイギリス出身で現在ロスアンジェルズに住んでいるアーティストで、対象をいきいきと描き出すドローイングの能手として知られています。その彼は一九八〇年代に入るときに写真を使った作品を発表しはじめました。最初は正方形のポラロイド写真を基盤の目のように並べた形でしたが、八二年頃からカラー写真を自由に組みあわせてコラージュするこの作品のようなやり方をとるようになります。複数の場面(時間と場所)が同じ画面に配置されることによって、重なりあい、アメイバのように伸び縮みしている時空間の広がり表現されています。

このようなフォト・コラージュは、未来派やキュビズムの画家たちの仕事を連想させます。自分も画家であるホックニーは、微妙にずれた複数の視点を導入することで、彼が写真の欠点と考えていた、時空間を「凍りつかせて」しまうという性格を解体し、再構築しようとした。しかし一方では、ホックニーは写真の正確でしかも柔軟な描写力を巧みに利用している。注目すべきは、画面の下の方

⑩ — デイヴィッド・ホックニー「文字合わせゲーム、ロスアンジェルス、1983年1月1日」(一九八三)



に写っている彼の左手です。このイメージによって、彼自身と他のゲームの相手(右側に写っているのは彼の母親)との空間的、心理的な関係がはつきりと伝わってきます。ホックニーのフォト・コラージュは画家の眼と写真家の眼の見事な融合といえるでしょう。